

平成23年2月12日

石坂会（第6回輪読会）・レジュメ

大久保啓次郎

朝鮮と福澤諭吉（石坂巖先生の最終講義：1986年）

0. このテーマを選んだ理由→福澤を読むきっかけは商学部入試問題漏洩事件

- (1) 朝鮮に対する加害者意識を自分自身（石坂先生）が再認識した。
- (2) 「脱亜論」で福澤が主張している真意を世間に発表したい。
- (3) 学問研究者として歴史の真実を明らかにしたい。

1. このテーマへのアプローチ方法

- (1) 日本、朝鮮、中国の三つの立場からのアプローチが必要。
- (2) 朝鮮は「文」と「原理」の社会の国である。
- (3) 日本は「武」と「現世第一」の社会の国である。
- (4) 社会構造の違う二つの国の絡み合いが近代日朝関係のあり方であった。
- (5) この絡み合いの中で演じた壮大な歴史的ドラマが福澤と朝鮮であった。
- (6) 「脱亜論」を書いた以降の福澤の言動は果たして「脱亜入欧」だったか？
- (7) 福澤は、清国と朝鮮とは区別して違った態度をとっていた。「中国は腐儒の国」だと言って批判したが、朝鮮は愛情の対象であり、朝鮮に感溺した。

2. 福澤と朝鮮との出会い

- (1) 明治初期の頃、福澤は朝鮮に無関心であり、むしろ朝鮮を軽蔑していた。
- (2) 明治10年代後半から急激に朝鮮に関心を強めた。
- (3) 明治15年、時事新報発刊。15年の時事新報：朝鮮についての論説31編、これを含めて以後、明治18年まで約80編発表。明治25,6年から30年頃まで約80編。
以上のように明治10年代後半期と20年代後半期に集中的に朝鮮についての論説を発表。それ以外の次期にも時々、論説を発表している。
- (4) 明治9年、日朝修好条規の締結により日朝間の国交開始。
- (5) 明治10年、京都の東本願寺が釜山に寺を開く。朝鮮人の僧（李東仁）が11年の終わり頃同寺を訪問。翌年本願寺の僧と日本へ密航。李東仁は、福澤の門弟であった寺田福寿の紹介で、明治13年秋頃福澤邸に出入り。
これが福澤と朝鮮とのつながりの始まり。
- (6) 明治14年朝鮮から大規模な視察団が来日。団長格の3人が福澤邸を訪問。
- (7) 明治15年3月6日、金玉均が、坊主の寺田福寿の紹介で福澤邸を訪問。

- (8) 明治 15 年 3 月 11 日、時事新報に「朝鮮との交際を論ず」を掲載。朝鮮論についての最初の論説。以後、改革派金玉均と福澤諭吉は太いパイプで結ばれる。

3. 福澤の立場：朝鮮の文明化・近代化

- (1) 福澤の根本精神＝文明化（「文明論の概略」）：内的文明と外的文明
- (2) 福澤の朝鮮に対しての態度→朝鮮の文明化で一貫している。
- (4) 朝鮮・清国の政変と福澤の態度
 - 明治 15 年：壬午軍乱・・朝鮮軍隊の反乱、指導役日本軍人殺害
 - 明治 17 年：甲申政変・・改革派のクーデター、金玉均グループ
 - 明治 27 年：東学党の乱（農民戦争）
 - 明治 27 年：甲午の改革（内政改革）・・親日派の改革（日本の要求）
 - 明治 27 年：日本兵朝鮮王室乱入事件
 - 明治 27 年：日清戦争→「戦勝を後悔するものなり」（明治 30 年時事新報）
 - 明治 28 年：朝鮮王妃殺害事件（日本外交官と右翼浪人）
 - 明治 29 年：朝鮮国王・皇太子のロシア公使館逃げ込み事件
 - 明治 30 年：甲午改革（内政改革）失敗→小村・ウエーベル協定（日・露）
 - 明治 31 年：変法運動（清国近代化運動）
 - 明治 31 年：「対韓方針」（時事新報）・・朝鮮の文明化工作への敗北宣言

4. 福澤の朝鮮文明化への具体的取り組み・提案

- (1) 壬午軍乱による日本への賠償金の使い方→朝鮮のインフラ整備に（提案）
- (2) 朝鮮への資金援助→インフラ整備及び新聞、教育等の文明事業（提案）
- (3) 慶応義塾への留学を奨励→目標は 1,000 名名であったが実現は 200 名
- (4) 明治 27 年頃改革の機運が出てきた時、「時事新報」の論説で訴える→外交、警察、税制、貨幣制度等の改革、銀行の設立、宗教、教育、衛星運輸、交通等々、朝鮮社会全般に亘っての改革。改革の目的は文明化。
- (5) 朝鮮政府が 5 百万円の公債を日本で募集した時に福澤は積極的に後押し。
- (6) 改革が困難で早急に期待出来ない→国民教育、普通教育の方向に力点。

5. 福澤の絶望と反省、最後の提案

- (1) 朝鮮政治改革への絶望感→各国共同で朝鮮改革をしたらどうか（提案）
- (2) 対朝鮮政策、その改革の失敗を顧みて「対韓方針」の変更→朝鮮の政治改革から手を引くべきである。
時事新報「対韓方針」「対韓方略」（明治 31 年 4 月）で訴える。
- (3) 朝鮮文明化の政治的改革的絶望、自分の誤り。（義侠心問題）
- (4) 「理に走って人情を忘れるな」という注意を福澤自身が忘れていた。

6. 「脱亜論」が執筆された背景

- (1) 明治17年12月4日にクーデター（甲申政変）を起こした人物は、福澤諭吉の所へ来ていた人と、慶応義塾へ留学していた人のグループが大半。
- (2) 甲申政変の失敗による福澤の挫折感は筆舌にし難いものであった。
- (3) 清国と朝鮮に対し怒りをぶちまける→時事新報「朝鮮事変」＝（在朝鮮の日本国人にどうも関係なし」、「支那傭の残虐さ」、「朝鮮事変の処分法」。
- (4) 甲申政変の翌年1月末～2月初めに、朝鮮で独立党の親類縁者に対する容赦ない処刑が行われた。→「朝鮮独立党の処刑」で事大党を厳しく批判した。（・・・野蛮と評せんよりは妖魔悪鬼の地獄図なり。・・・涙落ちて原稿紙を潤すを覚えざるなり。）
- (5) 甲申政変の失敗による福澤の「挫折感と憤激の爆発」の下に、執筆された社説が「脱亜論」である。（明治18年3月16日、時事新報）

7. 「脱亜論」をめぐって

- (1) 「脱亜論」は「朝鮮への絶交状」であり「朝鮮の文明化工作への敗北宣言」である。→しかし実際にはこの時期本当は、朝鮮との交際、朝鮮への文明化を（福澤は）諦めてはいない。
- (2) 福澤の朝鮮への熱き思いは、この後長逝の1年前（明治33年）まで続き、「国民の覚悟」（明治33年7月28日、時事）北清事変と朝鮮の関わりに触れている。（福澤が朝鮮に言及した最後の論説である。）
- (3) 「挫折感と憤激の爆発」の下に書かれた「脱亜論」よりも朝鮮人を侮蔑した論説も執筆→「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」（明治18年8月13日）、「朝鮮の滅亡は其国の大勢に於いて免る可らず」（未掲載）
- (4) では何故、「脱亜論」だけが、注目され批判されるのであろうか？
「脱亜論」の文章の最後の方にある、「支那朝鮮に接するの法も、正に西洋人が之に接するの風に従って処分す可きのみ」の解釈の問題である。福澤に対して批判的な学者は、この字句を捉えて、「西洋人がやっているように、植民地化せよ」＝「侵略せよ」と解釈し、福澤を侵略主義者と決めつけている。一方、福澤を擁護する立場の学者は、この字句の解釈を余り深く考えていない。「西洋人がやっているように付き合え」とする。

8. 福澤諭吉の家計簿→朝鮮人のために払ったお金（福澤全集21巻）

○明治29年9月29日（365円） ○10月30日（285円） ○11月30日（285円）
○12月26日（365円） ○30年1月29日（1,040円） ○2月24日（630円）
○3月28日（630円） ○5月28日（710円） →合計4,310円（現価4,310万円）

9. 家計簿にみる福澤と朝鮮人 {朴泳孝の場合} →全集 21 巻

(明治 29 年～30 年福澤の金銭出納帳から)

- (1) 朴泳孝は、改革を巡る権力争いに敗れ、明治 28 年 7 月 7 日に再亡命
- (2) 朴は福澤により迎えられ、さらに福澤の世話で米国に亡命する。
- (3) 明治 29 年 5 月下旬に日本に戻る。
- (4) 明治 28 年～29 年に福澤及び三女が朴泳孝に支払ったお金

○28/7/10(100 円) ○7/28(223 円) ○7/29(20 円) ○8/3(520 円)(420.70 円)
○8/5(20 円)(1,000 円) ○8/30(9.20 円) ○12/26(11.60 円) ○29/1/25(500 円)
○5/10(32 円) ○6/13(120 円) 8/13(120 円) ○三女から 28/7 中旬(90 円)
→ 合計 3,186.5 円 (現価 3,186.5 万円)

- (5) {朝鮮を知る辞典} →朴は日韓併合後は朝鮮貴族として侯爵になった。

10. キーワード：「朝鮮と福澤諭吉」 (順不同)

朝鮮の文明化 脱亜論 日本帝国主義 日本の朝鮮植民地化
清国＝腐儒の国 朝鮮に惑溺 時事新報 李東仁 東本願寺
寺田福寿 金玉均 朴泳孝 「朝鮮との交際法」 壬午軍乱
甲申政変 東学党の乱 内政改革 閔妃 日清戦争＝文野の戦争
変法運動 高宗 大院君 閔妃殺害 小村・ウエーベル協定
朝鮮の独立 対清協調の 9 年 日朝修好条規の締結 「対韓の方針」
朝鮮独立党の処刑 朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す
朝鮮の滅亡は其国の大勢に於いて免る可らず 兵備拡張論の根拠

以上